

平成22年度第1回生駒市子ども読書活動推進計画実践会議議事録（要約）

日 時： 平成22年7月5日（月）午後1時30分から

場 所： コミュニティセンター 206会議室

【委員】 岩崎れい、松田孝一、平井富久子、西村與里子、木戸直子、深田紀美子、
峯島妙、井上廣、松本陽子
(欠席) 山中和幸、平田敦子

【事務局】 生田敏史、向田真理子、平澤佐千代（以上図書館）
西野敦、上田修司（以上生涯学習課）

1 開会

- ・ 辞令書交付
- ・ 図書館長挨拶
- ・ 委員紹介、職員紹介

2 案件

(1) 会長の選任について

図書館における子どもの読書や学習への支援のありかたについて研究している京都ノートルダム女子大学准教授岩崎れい氏が推薦され、委員の賛同を得て選任される。

(2) 副会長の選任について

要綱により会長の指名による。社会教育委員会議図書館運営部会から選出された松田孝一委員が指名される。

(3) これまでの実践会議の取り組みについて

◎ 新委員を多く迎え、事務局からこれまでの経緯や取り組み等を説明。

- ・ 家庭、地域、学校という子どもの身近にいる大人たちが読書の重要性を再認識し、互いに連携して子どもの読書環境の整備を進めるために、平成16年6月に「生駒市子ども読書活動推進会議」を設置し、平成17年3月に「生駒市子ども読書活動推進計画～伝えよう、どきどき わくわくを！」を策定。計画の趣旨に基づき、その推進活動の母体として、平成17年6月に「生駒市子ども読書活動推進計画実践会議」を設置し、5ヵ年で行ってきたさまざまな活動をまとめて、平成22年3月に「生駒市子ども読書活動推進計画実践会議 5ヵ年のまとめと今後の課題」を作成。

◎ 主な活動状況等

- ・ 図書館では対象年齢別の5種類のブックリストを作成し、学校、幼稚園、保育園等と協力して対象全児童に配布。ボランティア等成人には図書館・室で配布。（『あかちゃん絵本リスト』（ブックスタート事業で配布）、『3才からの絵本リスト』、『読み物リスト（小学校1～3年生対象）』、『読み物リスト（小学校4～6年生対象）』、『読み物リスト（中学生対象）』）
- ・ 平成21年10月から健康課の「こんにちは赤ちゃん事業」とタイアップした、ブックスタート事業を実施。（ブックスタートとは、地域に生まれたすべての乳児と保護者が絵本を介して心をふれあうひとときを持つことを目的として、絵本やブックリストなどをオリジナルバッグに入れて、読みきかせ方等の説明とともに渡すこと。）
- ・ ブックリスト掲載図書をセットにして図書館から学校等へ団体貸出。
- ・ 学校等への出前授業おはなし会、出前授業ブックトーク、出前絵本の会の要請増加。図書館と「生駒おはなしの会」が協働して以上の事業を行う。図書館と文庫との連携では、団体貸出や文庫PRイベントの開催。
- ・ スクールボランティア等からの要望により、絵本の選び方、読み聞かせ方、修理等に関する講習会等（図書館職員が担当）を実施。
- ・ 平成21年度は学校図書館司書を1人配置 小学校3校週1回
平成22年度は2人配置 小学校6校週1回
平成23年度は小学校12校中学校8校の全校に週1回配置予定

◎ 委員からの主な意見

- ・ 自分が子どもの頃に比べて学校図書館の本が少なく感じる。生駒市では始まっているが、学校図書館司書がいて、子どもが選ぶ時の支援などをしてもらえるといい。
- ・ 小学校の図書の充足率は100%を超えているところが多いが、マンモス校で児童数が増加しているところでは追いついていないところもある。
- ・ 小学校としては、図書館の団体貸出や出前授業はありがたい。
- ・ 保育園や幼稚園では、3才前の子どもはみんなで読むというのは難しいが、働く親で読み聞かせの余裕がない場合など、保育士が読み聞かせを出来ればいいと思うし、実際行っている。寄贈図書は、保護者にも貸出を行っている。本の分類やおはなしの仕方などいろいろな情報の支援があればいい。
- ・ 子どもの本連絡会として学校図書館司書のいる学校を訪問して、校長先生や司書教諭にお話を伺ったら、学校図書館司書が配置されてからすごく変わったと喜んでおられた。学校図書館司書が本の整理や本の紹介を行い、PTAからの協力もあった。

(4) 平成22年度事業計画について

- ◎ 『理科読をはじめよう 子どものふしぎ心を育てる12のカギ』の共著者で元福音館書店『かがくのとも』編集長の森達夫氏の講演会開催の提案。自然界に対してときどき感動して眺める気持ちを就学前の子は持っている。持ち続けてほしい。
 - ・ 文学だけでない世界にふれてほしいので、おはなし会にも科学の絵本を使う。3、4年生は子どもっぽいと言いながらも興味を持って見ている。安易な科学の本が多い中、『かがくのとも』は大人も新たな発想を得る本。
 - ・ 学校や図書館の選書も指導いただけるなど、委員賛成多数に付き、推薦委員と事務局から森氏に依頼することに決定。
- ◎ 絵本の選び方や、どうしたら子どもが興味を持つかを、細かくわかりやすく講演される高山智津子さんの講演会開催の提案があったが、高山さんは既に他界。

(5) その他

- ◎ 各委員から子どもの読書活動推進への思いを含め自己紹介を行う。
- ◎ 岩崎会長から、今後の参考になるような学校図書館の可能性などの講義。
 - 子どもたちの読書活動をなぜ支援するのか？なぜ大事なのか？
 - ・ 読書の楽しみを知ってほしいから。計画の合言葉にあるように「伝えよう、ときどき わくわくを！」。本の向こう側にある真理をつかむ。学ぶということは何かをつかむということ。
 - 学校図書館の3つの可能性
 - 読書センターとしての役割。読書を支援する役割は、0才から18才まで継続。
 - ・ イギリスでは、どんな家庭に生まれても本にふれあう環境をと「ブックスタート」が始まる。耳、目の不自由な子ども、ディスクレシア（難読症等）、多言語の子どもたちへの支援にも力を入れている。
 - ・ アメリカでは、読書と読解力への支援。落ちこぼれを作らない教育。
 - ・ 日本では、小学校低学年になったら何を読んだらいいかわからなくなる。字が読める」と「本が読める」は違う。読める本（能力）と読んでほしい本（興味）のギャップがあり、自分で読ませようとするのが本をきれいなきっかけとなることもある。読んであげてほしい。
 - 中高生は図書館のイメージに左右される。イメージは学校や友人により違うので、学校による雰囲気づくりが大きい。
- ・ 公共図書館との連携では、図書館が提供する多くのサービスを知らしめ、出て行くサービスも必要。その地域の学校の状況を図書館が知っていることや情報の共有

が望まれる。宿題、進学・就職の支援など、高尚だけでなく身近に役立つ図書館に。

- ・ 「学校図書館は公共図書館から本を借りればいい」だけではなく、基本は揃える。読みたい本がない魅力的でない学校図書館では子どもは行かない。選書は中長期的であり、図書館全体のコレクションバランスが大事。専門の人がいてはじめて意味がある選書構成ができる。

② 学習・情報センターとしての役割

- ・ 授業でフル回転する学校図書館が理想的。場所も校舎の端ではなく、中学生と高校生の校舎の真ん中（出会う場所）にある図書館もある。
- ・ 子どもに本を選ぶ力がないとベストセラーや友人の薦めに頼る。ブックトラックにお薦めの本を載せて朝読の時間に回り、簡易貸出機でその場で借りれる工夫なども必要。
- ・ 「ラーニングコモンズ」という教育におけるパラダイムの転換が起きている。教えるから学ぶ、楽しく主体的に学習する力の育成という考え方。パソコンを自由に使えるスペースを設けたり、図書館はただ本を借りるだけ、静かに調べ物をしたりするだけの場所ではなく、仲間とディスカッションをしたり、自分たちが情報を発信する場にもなるという考え方。
- ・ 大きくなったら自分で使うという図書館の利用教育も必要。「図書館クイズ」「図書館マナークイズ」など楽しく活用。

「パスファインダー」という特定のテーマに関する文献や情報の調べ方を書いたものも有効。1枚2枚と徐々に作れるので、時間がなくても可能。低学年でも役立つ。

③ 教材センターとしての役割

- ・ 校内連携と公共図書館との連携が求められる。その前段階にあるアドボカシー（こういう風に役立つと発信、説得すること）の実践。下から上への説得だけではなく、いろんな立場の人が図書館のイメージの共有を図る。

○ 最後に保護者の立場からみて

- ・ 子どもの教育に税金を使ってほしい。
- ・ 50～60年代は文庫などの住民運動型ボランティア、90年代は業務委託型ボランティア、00年代は生涯学習型ボランティアと言える。このうち、業務委託型は評価できない。学校と保護者が協力し、共有した気持ちを持ってこそボランティア。保護者の思いを入れてもらい、子どもの環境が良くなってくれればと願う。